

「救いは主にあります」

(詩篇3・1-8)

一、詩篇3篇に聞く

1節を() 覧ください。〈主よ なんと私の敵が多くなり 私に向かい立つ者が多くいることでしょう。〉とあります。作者と考えられるダビデは、この詩篇を作ったとき、〈私の敵が多く〉いると語りました。「私の敵」とはだれなのでしょう。並行法で受け止めるなら、2行目の〈私に向かい立つ者〉です。

ところで私たちが「敵」を考える際は、だれが敵なのかを注意して、見極める必要があります。詩篇は神のことで、すから、「敵」とはもはや人間ダビデの「敵」ではなく、主に油注がれたメシアに対する「敵」です。ですが多くの人が、そして私たちも含めて多くの信仰者が、「敵」をまちがえて捉えることが多いです。生まれながらの人にとっての敵は、自分に反対する人です。これは、注意しなければなりません。「敵」とはだれなのでしょう。2節を() 覧ください。〈多くの者が私のたましいのことを言っています。彼には神の救いがないと。〉と。〈多くの者〉とは、ダビデが知っている者たちです。なぜなら2行目で、〈彼には神の救いがない〉と、ダビデを指して語っているからです。ダ

ビデを知る多くの人が、ダビデに向かい「彼には神の救いがない」と語ったのでした。

このような場面をダビデの生涯に当てはめようとするなら、表題にありますように〈ダビデがその子アブサロムから逃れたとき〉としか考えられませんが、実の息子から裏切られ、息子との衝突を避けるために自分からエルサレムを離れたダビデ。それまでダビデに従っていた者たちが、息子アブサロムに鞍替えをして行きました。サウルの家来だったシムイは、ダビデに口汚く呪いの言葉を浴びせました。その時〈多くの者〉がダビデに、「彼には神の救いがない」と語ったようです。「敵」とは、詩篇に聞くなら「彼には神の救いがない」、言い換えるなら「あなたか信じている神には救いがない」と思わせるものであると教えられます。

二、信仰者に現れる御力

神を信じる者の真価が問われるのは、試練に遭ったときです。順調に進んでいるように見えるときは、「神さまのおかげです」「イエスさまのおかげです」と語ることができます。ですが、自分が願ったようにならない日々が続くと、「神さまは働いておられるのか。イエスさまは何をしておられるのか」とほやくようになります。人は試練に遭うと、今まで目立たなかったものが現れ

てまいります。怒りや不安が頭をもたげ、人を責めたくなったりします。ですが、ダビデは祈りの人でした。その意味は、常日頃から祈っていたということですが、こうしてダビデは、抑圧された分だけ、主にあつて跳ね返すことができしました。その言葉が3節です。〈しかし主よ あなたこそ 私の周りを囲む盾私の栄光 私の頭を上げる方。〉と。なぜ、まことの「敵」を見分け、「敵」を押し退けることができたのでしょうか。それは、くり返しになりますが、常日頃より祈っていたからです。4節です。

〈私は声をあげて主を呼び求める。すると主は その聖なる山から私に答えてくださる。〉と。これは、常に祈っていたからこそ、ほとぼしり出る確信です。5節も、主を信じ、祈っているがゆえに生まれる確信です。〈私は身を横たえて眠り また目を覚ます。主が私を支えてくださるから。〉と。この手の確信は、理屈では得られません。日ごろより、祈りの生活をしている者に現れる確信です。6節を() 覧ください。主への信頼が、大きくなっています。〈私は幾万の民をも恐れない。彼らが私を取り囲もうとも。〉と。

以上のような流れで見えてまいりますと、7節は、主に求める言葉ではありませんが、「必ずそうなる」という確認に満ちています。〈主よ 立ち上がってください。私の神よ お救いください。あ

なたは私のすべての敵の頬を打ち 悪しき者の歯を砕いてください。〉と。

ダビデは、「敵」がだれであるかを知っています。だからこそ、しっかりと「敵」に照準を合わせる事ができました。「敵」はだれなのでしょう。新約の言葉を引用するなら、エペソ人への手紙6章12節を挙げる事ができます。〈私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。〉と。〈血肉〉とは人間の事です。私たちの敵は、「神は救いをもたらすことができない」「救いをもたらすことができない」と、人を通して語る悪魔・サタンの声です。

三、救いは主にある

2節の、「敵」が語る「彼には神の救いがない」を受け、ダビデは「救いは主にあります」と告白しています。それが、8節です。〈救いは主にあります。あなたの民に あなたの祝福がありますように。〉と。2行目の〈あなたの民に あなたの祝福がありますように。〉は、「敵」に打ち勝つ祝福が、主を信じるイスラエルにありますように、と語られた祝福のことばです。

「救いは主にある」。これが、私共が主からいただいた確信です。この恵みが奪われないように、主にあってご注意ください。